法政大学
担当部署連絡先　研究開発ｾﾝﾀｰ科研費担当　作成日：2024年11月10日
E-mail：suisin@adm.hosei.ac.jp　更新日：—

多文化理解と共生を目指した英語教育（語用論的指導）と教員養成

文学、言語学およびその関連分野

研究者所属・職名：
リベラルアーツセンター・経営学部　教授

ふりがな　いしはら　のりこ
氏名：石原　紀子

主な採択課題：
- 基盤研究(C)「言語・文化の多様性を活用した語用論指導と教師教育：多文化理解と共生を目指して」（2022 – 2026）
- 基盤研究(C)「語用論的指導を奨励する教員サポート体制の整備とこれからの語学教員教育」（2015 – 2020）
- 基盤研究(C)「年少者及び成人学習者を対象としたプラグマティックス指導とその効果」（2012 – 2014）

分野：外国語教育、教員養成

キーワード：多文化理解、多文化間コミュニケーション、語用論的能力、国際語としての英語、多言語主義、トランスリンガリズム

課題

●なぜこの研究をおこなったのか？（研究の背景・目的）

文法や発音は正しくても、文化や状況に沿ったことばの使い方ができなければ相手を傷つけたり怒らせたりしてしまうことがある。文化的背景をふまえ対人関係をわきまえながら適切に外国語を理解し、丁寧に、フレンドリーに、率直に、などことばを柔軟に使い分けられる能力を語用論的能力という。語用論的能力は多文化間コミュニケーションに不可欠であるが、そのような微妙なことばの使い方の習得法や指導法は広く認知されていない。本研究は、効果的な語用論的指導や、その領域に関する語学教員の研修・養成のあり方を検証する。

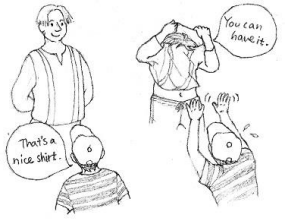

図1　「いいね」「あげるよ！」

●研究するにあたっての苦労や工夫（研究の手法）

グローバル化が進む現代では、従来のイギリス英語やアメリカ英語のみならず国際語としての英語をどのように指導できるかという議論が高まっている。しかし語学教育の現場では、概ね従来の英米の標準英語を模範とし、それ以外の英語の言語多様性を度外視する指導や評価が行われる傾向にあり、理論と実践にギャップがある。本研究では、語学教員はどのような言語観・（語用論的）言語意識を持ち、言語・文化の多様性をどのように理解しどの程度指導しているのか、また国際語としての英語についての知識がある場合には、どのように従来の指導との折り合いをつけているのか、などを問い、各教員がおかれた状況を十分考慮できるケース・スタディーによって詳しく掘り下げ、この分野の国内外での指導・評価・教師教育への示唆を考える。

法政大学
担当部署連絡先　研究開発ｾﾝﾀｰ科研費担当　作成日：2024年11月10日
E-mail： suisin@adm.hosei.ac.jp　更新日：―

多文化理解と共生を目指した英語教育（語用論的指導）と教員養成

文学、言語学およびその関連分野

研究成果

●どんな成果がでたか？どんな発見があったか？

グローバル化が顕著となり国際語となった英語の指導法が再検討されるようになった今、語用論の分野でも、どの国や文化の英語のポライトネスを標準にして指導すべきかという問いが提起されている。理論上は、言語・文化の多様性や他者への寛容な姿勢を重要視するため、学習者に提示する英語を極わずかでも多様化させ、たとえば、インド・ナイジェリア・ポーランドで使われている英語など、いくつかの英語の丁寧表現や直接・間接的コミュニケーションの用い方などについて、時間が許す限りの比較検討・理解を促すことが一つ回答となり得る。
また、日常的に多言語を使い分けながら生活する多言語主義が広がる今日、語学教育においても、モノリンガリズムや母語話者主義を超えた多言語主義やトランスリンガリズムを目標とすることがふさわしいと言える。語学教育の一環として他者を尊重し多文化理解を踏まえたコミュニケーション能力（intercultural competence）を培うことが大切であり、これはSDGｓ（Sustainable Global Goals）の一環でもある(Goal 16: Promote just, peaceful and inclusive societies公正で平和的かつインクルーシブな社会を推進する)。本研究では、多言語アイデンティティーや主体性、そして多言語話者のハイブリディティを念頭に置いた語用論的指導例を構築し、語学指導の現場への導入や応用を試みている。

図2　SDGs 目標16: 公正で平和的かつインクルーシブな社会を推進する
Images from the United Nations Sustainable Development Goals web site (The content of this publication has not been approved by the United Nations and does not reflect the views of the United Nations or its officials or Member States)

今後の展望

●今後の展望・期待される効果

今後とも明示的語用論的指導の例や考え方を紹介するとともに、グローバルな文脈を前提とした多言語語用論の指導におけるガイドや例を提案し、語学教員にも国際語としての英語やトランスリンガリズムを目指す言語指導について、協働で深く考察する機会を提供する。日本でも海外からの移住者や観光客が増大しているなか、語学学習者、教員ともに、多文化理解、言語・文化的多様性や流動性の認知、他者に対して寛容で開かれた姿勢をもつことを、今後の語学教員養成や研修の機会を通して奨励したい。

図3　多文化共生のコンセプト